

【数字で知る自分の畑】

畑の数值管理を考える前に必要なのは、自分の畑の実情を知ることです。数値で管理するというと、土壌分析を詳細に行なったり、温度や天候などを記録したり、作物体の栄養分析などをイメージする方が多いでしょう。確かに重要ですが、これらは、作物を作るための条件、すなわち周辺情報に過ぎません。最も必要なのは、畑でどのくらいとれているのかという収量情報です。いくら畑の環境条件を詳細に記録したとしても、畑の収量データがなければ活かせません。

前回は書きましたが、自分の畑の出荷量（収量ではありません）は、多くの方が知っています。しかし、不良で捨てた分を把握している人を見たことがありません。出荷量は把握できているか、畑でどのくらいとれているのかを知らないのです。

収量アップの近道は、不良率を減らすこと

例えば、不良品を除いた出荷割合が高ければ、無駄のない生産であったということが分かります。出荷できなかつた割合、いわゆる不良率が

下がれば、それだけで出荷できる量が増えます。つまり、出荷量を収量とするのではなく、畑でどのくらいとれていて、出荷できなかつた部分はどれくらいあったのか、というリアルな数字を知ることが第一歩になるのです。

ところで、前回、お金の管理を把握することは今や誰でもやっているというところを書きました。面倒でもお金がどのように入金され、出金はいつ何の用途で行なわれたのかを記録します。お金の流れを記録として残すこと自体は何ら利益をもたらさ

あなたの畑の不良改善度チェック

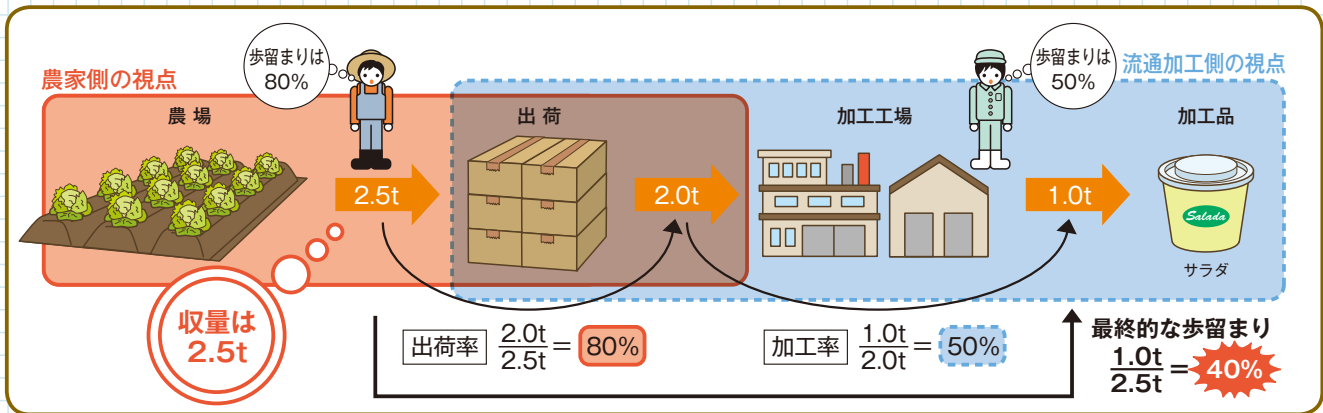
- 畑からどのくらいとれるかを知っている
- 畑の出荷量と不良率のデータを管理している
- 経営目標は収量増より不良を減らす方が先だ
- 畑で不良を発生させる要因を把握している
- 最も障害の大きい要因から対処をしている

本連載を読んで、畑の実情を調べる方法を学んで実際に始めてみませんか。

岡本 信一 Shinichi Okamoto

1961年生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業後、埼玉県、北海道の農家にて農業研修。派米農業研修生として2年間アメリカにて農業研修。種苗メーカー勤務後、1995年 農業コンサルタントとして独立。1998年(有)アグセス設立代表取締役。農業法人、農業関連メーカー、農産物流通企業、商社などの農業生産のコンサルタントを国内外で行っている。講習会、研修会、現地生産指導などは多数。無駄を省いたコスト削減を行ないつつ、効率の良い農業生産を目指している。

PROFILE



ませんが、経営の現状を知るためには必要不可欠です。同じように生産量や不良の数を記録することは、経営改善に直接はつながらなくても、栽培方法の見直しなどに活用する最も大事な記録の一つになります。

農産物の栽培管理の中で自分の畑からどのくらいとれているのかを知るといのは、現状を把握するための入口ではないでしょうか。それができないうちは、科学的な管理を行なうことはできません。忘れないでください、管理を失敗して畑に捨てられた作物も皆さんの収穫物の一部であることを。管理一つでそれを出荷できるものに変えられる可能性があるということ。不良になってしまったものにもお金と手間がかかっているのです。

さて、畑の現状、収量や不良率を知ることの大事さを分かっていたのだと思います。それを実際に活かす方法を簡単に説明しましょう。

現在、多くの農業経営者の方が目指すべきなのは、不良率を下げることであり、単純な収量増ではないと思います。収量以上に不良率は、圃場管理によって違ってきます。不良率が5%以下の畑もあれば、40%近くが不良の場合もあります。不良率が40%の場合、不良率を半減させれば、60%しか出荷できなかったもの

不良の要因を調べて集中的に対処する

が80%になって、出荷量は33%増えます。収量33%アップより、不良率を20%減らす方が目標として達成しやすくなります。不良率を下げることで収量を上げるのも有効な近道なのです。

では、不良率を下げるために何が必要でしょうか？ 多くの方はすぐに答えを聞きたがるのですが、その前にどのような不良が多いのかを知らなければなりません。現状が分からないのにやみくもに改善策を施しても仕方がないからです。そのために畑の現状を知る必要があると書いてきました。

作物栽培の技術指標は、注意すべき点をすべて網羅してあるので、それが丹念に実行したとしても改善されるかどうかは分かりません。なぜなら、自分の畑が抱える問題と関係ない部分に改善策を施している可能性も高いからです。自分の畑では何が問題なのかを把握し、その問題に対して集中的に対処することが重要なのです。

生理障害が多いのか、収穫適期を逃したのか、肥大不足なのか、病気の影響か、虫害の発生なのか……。不良になる要因は様々ありますが、

最も不良を発生させる理由を客観的に調べるところから始めましょう。病気による障害が最も多いのであれば、病気の対処が必要ですし、生理障害が問題であるならば、生理障害への対応が求められます。病気が多いのにも関わらず、病気の対策を施さず、その他の改善策を講じても効果が無いのは当然です。

不良の多い順に3つくらいの要因を対象に絞って対策を施せば、かなり不良率は改善されます。現状を知らず、10番目に多い不良に対する改善策を施したとしても、効果を実感できません。10番目の不良要因は、全体に影響を与えられないからです。

最も障害の大きい部分から対処していく方法は、製造業だけでなくサービス業でも行なわれています。残念ながら、農業では何が問題なのか把握しないまま、栽培改善が行なわれているケースが多いといっています。

収穫期というのは、農業経営にとって最も忙しい時期なので、時間がないかもしれません。しかし、畑の実情を知ることが自分の経営の改善に影響するのだとしたら、自分の畑をぜひ調べてみてください。自分の畑について何が悪いのか、何を改善すれば良いのかが分からないということがより問題なのです。